

一と多の問題 - ハイデガーからアレントへ? -

著者	横地 徳広
雑誌名	モラリア
巻	26
ページ	61-78
発行年	2019-12-16
URL	http://hdl.handle.net/10097/00133348

一と多の問題

——ハイデガーからアレントへ？——

横 地 徳 広

序

ヤスバーズのラジオ講演『哲学入門』（一九四九年）との対でアレント『政治入門』は構想されたとも言われる（*Politik*, SS. 137-143）。とはいえ、アレントとの往復書簡でヤスバーズにも語られていないが、『人間の条件』（一九五八年）を「序章のようなもの」とした思索的連続性のもと（*Politik*, S. 200）、本論にあたる『政治入門』ではハイデガーの主題がさまざまにくりかえされる。たとえばハイデガーが『存在と時間』で提示した「意味への問い」や「解釈学的循環」（SZ, S. 1, §32, EM, S. 64）。若きアレントが参加したハイデガーの一九二四／二五年冬学期講義『プラトン・ソピステス』に登場するアリストテレスの概念の「知慮（*phronesis*）」や「動き（*Bewegung*; *kinesis*）」プラトンの概念の「ソフィスト」⁽¹⁾。ハイデガーがアレントに贈った『形而上学入門』（一九五三年）で検討された、ライプニッツの「なぜの問い（*Warum Frage*）」（EM, S. 1）⁽²⁾。

完成していれば哲学的主著となりえた『政治入門』草稿は、ハイデガーの思索に近い。

存在史家ハイデガーは「存在の意味への問い」とその「地盤」の仕上げを試み (SZ, §1; GA19, §65, S. 448)、アレントは『全体的支配の諸契機と諸起源』(一九五五年、以下『全体的支配』と略記)や『政治入門』において政治の多様な形態を辿りつつ、「政治の意味への問い」を提示する (Politik, S. 20, S. 3)⁽⁴⁾。政治的〈多〉の〈一〉は「複数性」のもとでの「自由」だと見抜く「洞見」的「判断力」は、その問いに答える能力であった。そもそもハイデガーが歴史的かつ原初的に思索するに、存在者を存在者として (on hē on)、了解する形而上学はプラトンに始まるが (EM, S. 65, GA65, §268)、なかでも彼の対話篇『ソピステス』やアリストテレス『形而上学』では〈一と多〉の形而上学的問題が吟味され、また『ニコマコス倫理学』(以下『ニコマコス』と略記)では事実にくしくして〈一と多〉の問題が解明されて (WM, S. 317)、この構えはカント『判断力批判』に引き継がれる。

この問題をめぐるハイデガーの思索は、『全体的支配』から『人間の条件』を経て『政治入門』草稿へと歩んでいったアレントによって、批判的にどう変奏されたのか。

小稿では【第1節】ハイデガーが“Sehen”や“Sicht”の多様性に注目して『ニコマコス』と『ソピステス』篇を比べ読んだ『プラトン』講義⁽⁴⁾の観点から『全体的支配』を考察し、【第2節】アレントがその『全体的支配』から『政治入門』へと思索を深める様子を辿りつつ、【第3節】アレントの概念として「政治的判断力」や「自由」を際立たせる。

1 『プラトン』講義から見た『全体的支配』

『ソピステス』篇では「哲学者」と見分けがたい「高貴なるソフィスト」⁽⁵⁾の第六定義はソフィスト規定と

認められず (*Sophista*, § 18; *GA19*, SS. 380-383) 高貴なソフィストと第七定義の本当のソフィストは表裏一体の仕方でそれぞれが「在ることの明さ」と「在らぬことの暗さ」として特徴づけられる (*GA19*, § 76, S. 530; *Sophista*, § 39)。「父親殺し」を経て「在らぬが在る」を正しく語る仕方を解き明かしたのは「エレアからの客人」だが、彼とは異なり、本当のソフィストは、「最大類 (*megista gene*)」の「同 (*tauton*)」と「異 (*heteron*)」の誤った結合にもとづいて「在らぬが在る」という「偽 (*pseudos*)」の存在を語った⁽⁹⁾。ハイデガーの解釈では、この総合的ロゴスもまた「として (*als*)」構造をそなえており、「何かとして」のその「何かをおきちがえること (*Verstellen*)」で偽の存在を語る (*GA19*, § 26, SS. 181-185, vgl. § 80, S. 605f., § 81, S. 607)。本当のソフィストは「在らぬ」の暗がりでも自分自身の正体がかまれない仕方で存在しながら、偽の存在を他者に語るわけである。これに対してソクラテスとも目された高貴なソフィストは「もっとも鋭い存在論的洞見 (*Einsicht*)」をもちいて他者と問答し、——アレントの概念理解にそくし、接頭辞の“*ein*”を「一」および「四格の名詞と結び合う“*in*”」の両者とする——「存在論的」な「アプリアリ」である最大類を「認取する (*noein*)」(*GA19*, § 76, S. 524)。こうして類の正しい結合を「見抜くこと (*einsichtig machen*)」⁽¹⁰⁾「見て整えること (*Sichten*)」をふまえて類の働きを見分けつつ (*GA19*, § 77, SS. 534-536, § 40, S. 259f., § 56, S. 357, S. 359) 高貴なソフィストは真の事象を他者とわかちもつ仕方で存在する⁽¹¹⁾。

その問答術の本質は見る⁽¹²⁾ (*horän*) である。結合 (*synagoge*) は見る (*Sehen*) 仕方であり、つまり、一 (*hen*) にする仕方である。また分割 (*diastasis*) は露呈 (*Aufdecken*) として、つねに一を眼差すこと (*Hinblicken*) から遂行される。⁽¹³⁾ (*GA19*, § 46, S. 349)

この〈見〉を解釈する光源が、『プラトン』講義前半部における『ニコマコス』の「実践的推論 (syllogismos *praktion*)」解釈である。⁽⁷⁾ ハイデガーが講義で前後半部を連動させたのも、アリストテレスの「問答的 (弁証論的) 推論 (syllogismos *dialektrikos*)」概念はプラトン「問答術 (dialektikē)」の改鑄であり (vgl. *Topica*, I; *GA19*, § 28, S. 203, § 30, SS. 214-216; *WM*, S. 370ff.)。実践的推論はその推論概念群の一つだからである。その場そのときの自分にふさわしい「善き行為 (eupraxis)」までを見通す知慮の解釈学的ダイナミズムに采配される実践的推論は「しかじかのことが起こるべきなら、私はかくかくにふるまい、しかじかであるべきなら、このとき、かくかくである」と図式化されるが (*GA19*, § 8, S. 50, § 23, S. 159)、「知慮の「目配りの洞見 (die unsichtige Einsicht)」は (*GA19*, § 7, S. 47)」「なる「最高善 (to ariston)」の「エウダイモニア」に裏打ちされた「エンドクサ」的大前提と、多なる個別的状况にまつわる手段的小前提との連関を、「テロス」の善き行為へと方向づける働きであった (*GA19*, § 23, S. 163)。

この『プラトン』講義に照らすと見えやすいのは、ナチスはワイマル議会の「無抑制 (akrasia)」に乗じてドイツ国法を乱用したが (vgl. *GA19*, § 22, S. 155; *EN*, VII-10, 1152a20-21; *WM*, SS. 323-326) 一三三年の「全権委任法」成立後は実践的推論の大前提たりうる既存の普遍を無効化し、その座にナチスの最高善という「悪徳 (kakia)」をすえたことである (vgl. *GA19*, § 22, S. 154; *EN*, VII-10, 1152a24)。同時に見えやすいのは、ナチス親衛隊のソフィストは「強制収容所」をもちいてその被収容者がこの世にまるで存在しなかったかのような「忘却の穴」を第三帝国に穿ち、⁽⁸⁾ 〈在るが在らぬ〉政治世界を制作したことがある。

一九三四年の「長いナイフの夜」で突撃隊のエルンスト・レームがナチス内で失脚し、親衛隊が権力掌握

した後の状況をアレントはこう述べる。

全体的支配の初期段階にあって並はずれて血まみれのテロルは、実は政敵を片づけて一切の反対を不可能にするためになされたにすぎない。ところが、こうした初期段階が過去のものとなり、政権がもはやいかなる反対も恐れる必要がなくなったときに初めて、真の全体的テロルが解き放たれる。(EUA, S. 646f[1910])

「初期段階」の「テロル」とは突撃隊の物理的暴力のことであり、「盲目的な野獣性」が指摘されるけれど(EUA, S. 663[1932])、^⑧「真の全体的テロル」は親衛隊による「工業的ジュノサイド」の全体主義を指し、^⑨親衛隊のソフィストが知慮の〈見〉で眼差す実践的推論の太前提的規範は「第三帝国の定言命法」^⑩となる。住民の一人一人が「生ける屍」になるまで「道徳的人格」と人間的「個性性」が破壊される全体主義運動はこうして自律化し(EUA, SS. 661-665[1929-934])、この自律が人種的全体主義者の疑似的な「『自由』(《Freiheit》)となる(EUA, S. 644[1907])。啓蒙主義の自律的自由概念は「自己愛」へのカント的批判と共に失われ、^⑪前景化するのは、ヴィクトール・クレンペラーが『LTI』(一九四七年)で描くように、「恍惚」のヒトラー教徒たちが「私はあの方(『ヒトラー』)を信じます」と言いつづける奇怪な姿であった(LTI, S. 144)。

こうしたカルト信者たちは、自己立法的自律どころか、自己吟味なき自己礼賛のヒトラー的コピーとなつて「一人の人間」へと融合し、それゆえ複数的な人間たちの多様な自由は消失する(EUA, S. 644[1907])^⑫。このときナチスの実践的推論は自動的になされ、親衛隊のソフィストはナチスの最高善という〈在らぬが在る〉と騙る同時に、ヒトラー教徒ではないドイツ第三帝国民やユダヤ人ら非市民という〈在るが在らぬ〉と騙る。この親衛隊的詭弁は、アリストテレスの『ニコマコス』第六巻における「技術知(techné)」の「真性化(alētheuein)」とは無縁、また『形而上学』第七巻における「医術」の実践的推論とも無縁であった

(*EN*, VI-4, *Metaphysica*, VII-7, 1032a6-9; vgl. *GA19*, § 7, § 8)。¹プラトン『ソピステス』篇で「体育術」や「医术」を例に説明された、高貴なソフィストによる「思考の浄化術」とも無縁の親衛隊的詭弁である(*Sophista*, § 14; vgl. *GA19*, § 56, SS. 360-364)。

親衛隊が権力を完全掌握した「一九三八年」以降(*EUH*, S. 658[925f])、ドイツ第三帝国全体を収容所化する全体主義運動が展開するなか、実際の強制収容所で「最大の集団をなすのは、被収容者の意識もしくは当局者の意識において逮捕と何か合理的な関係があることをそもそもしたことがない人びとであった」(*EUH*, S. 658[925])。この人びとを強制収容所へと「引き渡すさいの恣意 (*Willkür*) に対応していたのは、それ自体では無意味なのに組織的には「親衛隊の」目的に合致する仕方で被収容者に一定のカテゴリーを導入することである」(*EUH*, S. 659[927])。「この恣意が目指すのは、全体主義政權に支配されている人びとすべてから市民的権利を剥奪することであつた」(*EUH*, S. 660[928])。

言い換えれば、全体主義運動の諸々は死者たちの法則に従っているが、この法則は、全人類に全体主義の支配を強いることがたとえ成就したときでさえ、運動の法則でありつづける。人類そのものがプロセスの具体化、それゆえ、プロセス全体においてつねに変化し運動していくものになり、このなかでは「親衛隊にとって」余計なものや有害なものの永続的排除がいわば自動的に進む。(*EUH*, S. 679[953])
罪なき人びとをデタラメな理由で収容所送りにするというこの構図は、強制収容所を強制収容所たらしめる本質であった。ナチス親衛隊の全体主義という「根本悪」の理解不可能性を説明する箇所でアレントは次のように述べる。

途方もないままに全尺度を破壊する現実のなかで直面していることをわれわれが把握するのに、本来、何

かに頼りえない。この状況で浮上するのは、たった一つのことである。つまり、われわれとにかく確認可能なのは、人間すべてが等しく余計なものになるシステムとの連関においてこの根本悪が出現したということである。(E.U.H. S. 671[942])

親衛隊の全体主義にあって「計算的理性 (ratio)」が強制収容所へのユダヤ人輸送という「アイヒマンのロジスティクス」で駆使されたように、ナチスの最高善という悪徳が大前提の実践的推論では、知慮が正しく使用されるほどに根本悪は蔓延していった。

この根本悪を「とにかく確認できる」人間的能力とは、一体、何か。

2 高貴なソフィストとナチスのソフィスト

強制収容所の被収容者が「もはや実在していないかのように (als ob sie nicht mehr existierten)」(E.U.H. S. 653 [919])、⁽¹⁸⁾「まるでその人間たちがいなかったかのように (als ob sie nie gegeben hätte)」(E.U.H. S. 650 [915])、全体主義的世界を制作する親衛隊のソフィストの詭弁は (E.U.H. S. 653[919], S. 669f.[940f])、⁽¹⁹⁾政治的ドグマである。

『政治入門』によれば、この政治的ドグマから人びとを解放する能力が〈見〉であった。

「公共空間で」ホメロスの不偏不党性にもとづくその能力は、同一の事象を最初是对立面から、次に全面から見るが、この能力は古代に唯一のものであり、またわれわれの時代に至るまでその情熱の強さでは凌駕されていない。こうして見る能力の根底にはまたソフィストたちのトリックがあるけれど、このソフィストたちが人間的思考をドグマ的な諸制約から解放するために果たした意義は、もしプラトンの例に従い、

ソフィストたちが人びとから道徳的に断罪されるなら、軽んじられることになる⁽¹⁵⁾。

アレントの念頭にあったのは、ホメロス、哲学者にして古きソフィストのプロタゴラス (*Protagoras*, 316D)、高貴なソフィストという系譜である。「ポリスで最初に生じた政治的なことの形成」にとって「決定的であるのは」、「人びとがさまざまな側面から実際に諸事象を見る能力を獲得したことであり、それは政治的に見ることであった」(*Politic*, S. 96)。「プラトン」講義を手がかりに、とはいえ独自の仕方で彼女が解明したのは、ポリスに暮らす人びとが、ホメロスの系譜で開かれた不偏不党性のもと、多面的に事象を見る能力であった。こうしてアレントは、根本悪を「とにかく確認できる」〈見〉の働きに迫る。

決定的なことは、現実世界で前もって与えられる多くの可能的立場をとる熟練である。この立場から同じ諸事象は観察されうるし、この立場において諸事象は、それぞれの自同性にもかかわらず、もっとも異なったアスペクトの数々を示す。これは、ひたすらネガティブなことが生じ、さらに個人的な興味の禁止によって世界との結びつきを失い、世界の諸対象への愛着を失い、世界のなかで生起する諸事象を失う危険がある特異な利害関心 (*Interesse*) を排すること以上に重大なことである。(*Politik*, S. 96f.)

存在 (*esse*) のただなか (*inter*) での利害関心である "*Interesse*" は、カントによれば、「趣味判断から不偏不党性を奪う」が (*KU*, § 13, S. 61f.)、政治的な〈見〉をもつ高貴なソフィストはその利害関心に没入しない。考察すべきは、件の "*Interesse*" と "*Sorge*" の関係である。「超越」の重層的な「動性」が描かれた『存在と時間』では「気遣い＝関心 (*Sorge*)」はその「存在論的な意味」が「時間性」とされる超越論的な概念だが (*SZ*, § 65) とはいえマールブルク期の思索を受け、気遣いの原型がアリストテレスの「欲求 (*orexis*)」概念とみなされる面も残っていた (vgl. *SZ*, § 36, S. 171)⁽¹⁶⁾。そもそも「動きとこころ生」(*GAL* 9, §

3. S. 18) に注目する『プラトン』講義では、ハイデガーは『シュンポシオン』篇に従い、「魂は欲求という意味での動きである」と指摘し (GA19, § 77, S. 552)⁽¹⁷⁾、このことを同講義の前半部から照らし出している。そこで指摘されるに、行為へのプロセスを吟味する「思想 (dianoia) それ自体は何も動かさない」ので (EN, VI-2, 1139a35-36)、「思想的な欲求」である「選択 (prohairesis)」には (EN, VI-2, 1139a35-b5)⁽¹⁸⁾、その行為したい欲求が欠かせない (GA19, § 22, S. 150f)。「選択」概念のこうした解釈は、『存在と時間』における「覚悟性」の原型となり、「欲求」概念は気遣いの原型となった⁽¹⁹⁾。

気遣いと動きのこうしたハイデガー的概念史を知るアレントは『存在と時間』の超越論的な“Sorge”に⁽²⁰⁾ “Interesse”を重ねて彼に抗し、欲求概念に後世の「自由意志」概念への展開を見出す。そのうえで彼女は利害関心なき「適意」(KU, § 2, S. 40)にかかわる反省的判断力を知慮の洞見と結びつけ、洞見的判断力という〈見〉を独自に提示する。反省的判断力による「かのように (als ob)」の判断も親衛隊的ソフィストの詭弁にとりこまれ、またナチスの実践的推論にあって知慮の洞見も根本悪を蔓延させる現実には彼女は直面するなか、自身でその両概念を鍛え直す必要があったわけである。

このアレントにとって政治は、人間への“Interesse”や現存在の存在である“Sorge”を中心にすえて人間を変えるための営為ではなかった。「世界への関心 (Sorge um die Welt)」と洞見的判断力に支えられた事柄こそ政治であり (Politik, S. 24)⁽²¹⁾、それゆえ、超越論的思索ではなく、彼女流の「両義性の思索」で説明される必要があった⁽²²⁾。ハイデガーの高弟ガダマーによれば、両義性の思索は、「本来性と非本来性の絡み合い」を指摘した初期フライブルク講義から後期思想における「転回の思索」までをつらぬくが、アレント流のそれは「制約するもの」と「制約されるもの」の「相互制約」をめぐる思索であった⁽²³⁾。

『政治学』が後続する『ニコマコス』と『ポリティコス』篇が後続する『ソピステス』篇の〈見〉にまつわる諸術語でアレントは洞見的判断力の成り立ちをこう説明する。

ポリスの自由な市民に固有な理想と個別的に政治的な固有能力一般にとってその尺度は「知慮」、つまり、政治的人間がもつ洞見のうちにある（この政治的人間は「ポリティコス」であり、職業政治家はポリス的世界にいなかった）。知慮は知恵とほぼ無関係で、それどころかアリストテレスが知慮を定義しえたのも、知慮と哲学者たちの知恵との対立を強調したからであった。政治的な事態への洞見の意味は、とりうる立場と見地をもっとも広く見渡すこと（Übersicht）にはかならない。こうしてすべての立場と見地から事態は見られ、判定され、把握され、記憶されうる。（*Politik*, S. 97）

『テアイテトス』『ポリティコス』と共に三日連続の対話篇の一つとなった『ソピステス』では、古代ギリシャの人びとの目に映る哲学者は（アリストテレスの「哲学者」理解と異なり）、ポリティコス、高貴なソフィスト、本当のソフィストなど多様な現われを見せた。⁽²⁾なかでも高貴なソフィストの〈見〉は「先入見にとらわれず」（*KU*, S. 145, vgl. *Politik*, SS. 13-27）³政治的判断力の“Übersicht”にしろ“Einsicht”だとアレントは指摘する（vgl. *Politik*, S. 82f.）。その手がかりは、カントが「共同体的な（*gemeinschaftlich*）感覚」（*KU*, S. 144）を論じた『判断力批判』第四〇節「或る種の共通感覚（*sensus communis*）」としての趣味にある。彼は、判断力の理念たる共通感覚が「健全な悟性」（*KU*, S. 146）以上に「趣味」に近い点を説明するため、「1. . . 自分で考えること、2. . . どの他者の立場でも考えること、3. . . つねに自分自身に一致して考えること」という「共通の（*gemein*）人間悟性の格率」を例示したが（*KU*, S. 145）⁴、この「格率」をふまえてアレントは政治的判断力の“Übersicht”と“Einsicht”を吟味し、知慮との歴史的関係を次のように説明

する。

アリストテレスの場合、「知慮」は政治的な人間に本来的な枢要徳であったが、そのあと十数世紀を通じて言及されることもほとんどなくなる。カントのもとで初めてわれわれはふたたび知慮に出会うが、それは、健全な人間悟性が判断力という一つの能力として解明される場面であった。カントは判断力を「拡張された思考様式」と呼び、「どの他者の立場でも考える」能力として明示的に規定する。(Politik, S. 97)

「実際のところ、カント哲学にあって本来的に政治的な能力は立法的理性ではなく判断力であり、『判断の主観的で私的な諸制約』をのりこえうることに判断力の固有性がある」(Politik, S. 98; vgl. KU, § 40, S. 146)。「美感的判断力」と「目的論的判断力」は反省的判断力の両輪だが (KU, § 1, S. 39)「われわれには未知だとしても多様なものの一性の原理であること」をそれぞれが探し、「自然の特殊なことから普遍的なことへと上昇していく職務をもつ」(KU, IV, S. 16)。

ヒトラー教徒の実践的推論と、すべてを知っている「かのように」騙る親衛隊的ソフィストの実体とを見定めたアレントは彼らに抗し、何らかの〈一〉を政治的『洞見的判断力があらわにすると考えるが、小稿での問題は、プラトン『ソピステス』篇、アリストテレス『ニコマコス』、カント『判断力批判』でくりかえされた〈一と多〉への問いが、アレントとハイデガーに引き受けられた仕方である。

『プラトン』講義の前半部では、実践的推論の知慮は小前提の多様な個別的状況と大前提の普遍的な最高善との動的関係を眼差すことが語られた (GA19, § 23, S. 159; vgl. § 8, S. 50)。後半部では、第一定義から第五定義までが本当のソフィストの多なる現われを扱つ (GA19, § 57, § 46, S. 296; cf. Sophista, § 19)。第六定義と第七定義は連動しつつ、それぞれが高貴なソフィストと本当のソフィストの一なる本質を明かし

た (GA19, § 58, § 76; cf. *Sophista*, § § 13-18, § § 20-23)。「プラトン」講義はこうして『ニコマコス』と『ソピステス』篇に連続的な〈一と多〉の問題を〈見〉の観点から提示し、『存在と時間』冒頭の「導入」および第一節がそれを引き継ぐが、この『ソピステス』篇読解の光源となった知慮概念が『判断力批判』の反省的判断力に流れこむ点にアレントは着目したわけである。

知慮はガダマーからも洞見と呼ばれ (WM, S. 328f.)⁽¹²⁾、アレントにとって洞見は、そのつど〈多〉なる個別状況を見渡しつつ、全体主義運動に支配されない仕方での新たな〈一〉を見抜くこと (Einsehen) であった (Politik, S. 82f., S. 97)。それは、「複数性」と「誕生」の相互制約のもとでそのつど新たに考え始める自由の動性を本質とした〈一〉であり、複数性をつねに豊饒化していく動的な全一性であった。次節で検討する。

3 全体主義を打破する自由へ

『プラトン』講義で「問答 (dialegethai)」は「眼差しながら語る」と説明されたが (GA19, § 46, S. 349) 、アレントが考えるに、カントが「趣味」概念彫琢のさいに参照した「不偏不党的な観察者 (impartial spectator)」の〈見〉をもつ高貴なソフィストは、⁽⁸⁾見者にして問答家として不偏不党性を開く (vgl. Politik, SS. 80-83)。「ポリスの意味における政治的人間は、洞見のおかげでもっとも大きく動く自由をもち、すべての立場を省みる (berücksichtigen) 能力をそなえるがゆえに、自分に固有な卓越性において同時にもっとも自由な人間であった」 (Politik, S. 98)。多様な視点をもつ多様な人びとが語らう政治空間で「もっとも大きく動く自由」を遂行的に発見し、全体主義運動のドグマから人びとを解放するのが、政治的人間の洞見的判断力である (vgl. Politik, S. 97)。

同一の事象をもっとも異なる視点の数々から見ていく能力は人間世界に残りつづけるが、この能力ゆえに、自分に固有でありながら自然に前もって与えられていた立場は他の人びとの立場と交換されつつ、人びとは他の人びとと一緒に同一の世界のなかに滞在する (*welien*)。こうして人びとは精神的なことの世界で動く真の自由をめざすが、この自由は物理的世界で動く自由とまさしくパラレルである。 (*Politik* S. 97)

自分に固有な視点と時空間は「物理的世界で動く自由」と相即する⁽²⁸⁾が、この自由と「パラレル」なのが、「精神的なことの世界」で「もっとも大きく動く自由」である。アレントが考える政治空間は、この両世界が重なるところに開かれる。ハイデガーは『形而上学入門』で「世界の暗黒化」を指摘し、それは二十世紀の「精神的²⁹世界」にとっては「神々の逃亡」、大地の破壊、人間の集団化、凡庸の優先」という「本質的な出来事」の生起だと説明したが (*EM* S. 34)、この出来事を日常的に体现した「凡庸な悪人」アドルフ・O・アイヒマンとは異なり、高貴なソフィストの政治的³⁰洞見的判断力をそなえた人びとは、ドイツ第三帝国にあって実践的推論の大前提がナチスの最高善という悪徳へとすりかえられたこと、同時に〈在るが在らぬ〉、〈在らぬが在る〉と騙られていることに気がつきえた。

もちろんクレンペラーの回想によれば、彼が知る人びとは「誰一人ナチスではなかったが、すべての人びとが毒されていた」 (*LTI*, S. 131, S. 127)。だから、或るドイツ人は暗がりユダヤ人のクレンペラーに「ハイル・ヒトラー!」と挨拶してしまう。とはいえ翌朝、「ひと間違いをした」と彼に謝ることもできた (*LTI*, S. 131)。政治的³¹洞見的判断力をそなえる高貴なソフィストの基調低音は街のドイツ人からは消えていなかったからである。

これに対し、「議論をひっくり返して諸々の主張を転倒させうる」本当のソフィストは「ポリスで最初に

生じた政治的なことの形成」にとって「二次的」な「意義」をもつにすぎず (*Politik*, S. 96)、『その技術を継いだ面もある親衛隊のソフィストは、「全体主義イデオロギー」という大前提からすべてを論理的に導出し、「すべてを知っている」と豪語して「全体主義的な虚構世界」を制作した (*EUH*, SS. 668-670 [339f.])。全体主義イデオロギーの「本来的な目的」は (*EUH*, S. 670 [940])、『人間の自然本性がそのままなら、持続的に全体主義のプロセスと対立するので、その自然本性そのものを改造すること」にある (*EUH*, S. 670 [940f.])。ここまでは徹底して騙られる一種の「完全性」をアレントは「超絶的意味 (*Suprasinn*)」と呼ぶが (*EUH*, S. 668 [339])、『その「全体主義的支配体制」への「唯一の対抗原理 (*Gegenprinzip*)」こそ「自由の本質」であった (*EUH*, S. 692[969])。それは、『政治的＝洞見的判断力に見出される原理 (*Prinzip, arché*)』である。

「全体主義的支配による」テロは多くの人間を一人の人間にしようとする。テロという鉄の枷が阻止しなければならぬのは、どの人間であろうと一人が誕生すれば、それと共に一つの新しい始まりが世界に到来することであり、一つの新しい世界が始まることである。このことと同様、論理の自己強制が予防すべきは、どの人でもいつか新たに考え始めることである。 (*EUH*, S. 692[970], vgl. *Politik*, S. 50)

ナチス親衛隊は全体主義運動のなかで多様性を抹消しつつけ、ナチスの全一性は自動的に拡大する。その親衛隊が神経を尖らせるほどに自由それ自体が警戒されたのは、親衛隊のソフィストが制作する全体主義的虚構世界の疑似完全性を「新しい始まり」がそのつど崩すからである。人間的複数性ゆえに異性間で子供が生まれ、複数性は一人一人の新たな誕生によってそのつど更新されるなか、ナチス的な「一人の人間」は潰える⁽³⁰⁾。この複数性のもと、もっとも大きく動く自由の政治空間を政治的＝洞見的判断力で発見的に開くわれ

われ人間の思考はつねに「新たに考え始めること」でありえた (EJH, S. 692 [970])。

とはいえ「一定の生連関が広がるなか、行為の安定はどの覚悟 (Einsicht B) にも求められる新たな始まりによってつねに中断されている」、ハイデガーはそう述べてもいた (GA19, § 25, S. 174, vgl. § 22, S. 150)。或るひとの行為や思考も、当人と他人のいずれによるにせよ、別の行為や思考の発露に中断されるが、同時に新たな行為のたびに新たな始まりが人間に現われもする。⁽³¹⁾だからアレントは、自由に始めた何か新しいことをわれわれは一人で完遂できず、この完遂は複数の人びとのあいだでしか果たされないと強調した (Politik, S. 49f.)⁽³²⁾。

誕生一つ一つの終わることなき継続と制約し合う複数性のもと、政治的＝洞見的判断力をそなえた人間は全体主義を打破しつつ、自由に始めた「事柄 (pragmatische Sache)」を仲間にゆだねなければならない。複数性のもとでのこうした自由こそ、アレントが考えた政治の意味であった (Politik, S. 20, S. 3)。

*

『存在と時間』を著わす以前にハイデガーが見せていた「両義性の思索」を重んじるアレントも、とはいえ『存在と時間』を批判的に変奏して自由を語るかぎり、実は「超越論的ハイデガー」の形而上学という重力量に引きこまれていなかったか……。この問いはハイデガー学の文脈で今後の課題としたい。⁽³³⁾

凡例

原書の *italic* による強調には傍点を付した。□の補足は引用者。原典からの引用はすべて拙訳である。アレントの著作は以下で示す。Politik: *Was ist Politik? Fragmente aus dem Nachlass*, herausgegeben von U. Lindz, Piper, 1993. EJH: *Elemente und Ursprünge*

totaler Herrschaft, Europäische Verlagsanstalt, 1955. 参考に Piper 社版 (14. Auflage, 2011) の頁数は「で付す。ハイデガーの著作は以下で示す。GA は Klostermann 社のハイデガー全集。SZ は *Sein und Zeit* (1993[1927])。EM は *Einführung in die Metaphysik* (1998[1953])。ともに Niemeyer 社。プラトンとアリストテレスの著作は Oxford Classical Texts をもちび、ラテン語書名で示す。『ニコマコス倫理学』は以下の略号で示す。EN: *Ethica Nicomachea*, revised by I. Bywater, 1988[1920]. カント『純粋理性批判』は慣例に従って第一版を A、第二版を B で表記。『判断力批判』は以下の略号と Ph. B のフォレンダー版の頁数を記す。KU: *Kritik der Urteilskraft*, Ph. B., 39a, revidierte von K. Vorländer, 1990(1790). ガタペー『真理と方法』は以下の略号で示す。WM: *Wahrheit und Methode, Grundzüge einer philosophischen Hermeneutik*, 7. Auflage, Mohr Siebeck, 2010(1960). クレンスラー『LJ』は Reclam 版 (2007年) をもちびた。

註

- (1) Cf. J. Taminaux, *La fille de Thrace et le penseur professionnel*, Payot, 1992. W. Thaa, *Politisches Handeln*, Nomos, 2011.
- (2) Vgl. H. Arendt / M. Heidegger, *Briefe 1925-1975*, herausgegeben von U. Ludz, Klostermann, 2013, Nr. 84 (21. April 1954), Nr. 120 (12. März 1970).
- (3) この点は、拙稿「意味への問いと、ハイデガー、アレント：推論、問答、真性化の観点から」(東北哲学研究会編『思索』第五一号、二〇一八年)を参照。『政治入門』が「革命について」に代えられる直前とも言える一九五八年二月三一日付でヤスパースは、プリンストン大学講義を準備するアレントに手紙を出し、彼女が学生に喚起する問いとして「歴史とは何か、自由とは何か、全体的支配とは何か」を挙げつけた (*Hamann Arendt / Karl Jaspers, Briefwechsel 1926-1969*, 2. Auflage, Piper, 1987, Nr. 234, S. 396)。ヤスパースは『全体的支配』の延長上で『政治入門』構想を理解していたと言える。
- (4) Vgl. G. Figue, *Zu Heidegger*, Klostermann, 2009, S. 58, S. 114.
- (5) 納富信留『ソフィストと哲学者の間』(名古屋大学出版会、二〇〇二年)、六一頁。
- (6) *GA19*, 877, S. 534, 878, SS. 567-574, 880, SS. 603-605; 納富『ソフィストと哲学者の間』、三〇四-三〇八頁。
- (7) *EN*, VI-12, 114a31f. この点は、拙稿「ハイデガー『ソピステス』講義における「実践的推論」と「知慮」の解釈について」(日本現象学会編『現象学年報』第三四号、二〇一八年)を参照。
- (8) *EUH*, SS. 670[941]。この点は、高橋哲哉『記憶のエチカ』(岩波書店、一九九五年)の補論「アーレントは忘却の穴を記憶したか」を参照。

- (9) Vgl. *ELJH*, SS. 663-666(932-936). 工業的ジェノサイドについては、J・M・ラブキン『イスラエルとは何か』（菅野賢治訳、平凡社新書、二〇一二年）の二八六―二九四頁を参照。突撃隊については、南利明『ナチス・ドイツの社会と国家』（勁草書房、一九九八年）の第一章「合法革命」を参照。
- (10) 拙著『超越のエチカ』（ぶねうま舎、二〇一五年）の第五章「第三帝国の定言命法？」を参照。実践的推論の大前提をカントの普遍とみなす解釈は、たとえば菅豊彦『アリストテレス『ニコマコス倫理学』を読む』（勁草書房、二〇一六年）の八七頁以下を参照。
- (11) 中島義道『悪について』（岩波新書、二〇〇五年）の第一章「自己愛」を参照。
- (12) Cf. D. Stone, *The Holocaust and "The Human"*, in: *Hamann Arendt and the uses of history*, edited by R. H. King and D. Stone, Berghahn Books, 2008.
- (13) 拙著『超越のエチカ』第八章ss 4「アイヒマンのロジスティクス」を参照。
- (14) N. Goodrick-Clarke, *The Occult Roots of Nazism*, I. B. Tauris, 2004(1985).
- (15) *Politik*, S. 96. 併せて納富『ソフィストと哲学者の間』の二八九頁以下を参照。
- (16) ただし、アレントと異なり、神崎繁は『プラトンと反遠近法』（新書館、一九九九年）で「ホメロスにおける遠近法的叙述の不在」（八頁）を指摘する。ハイデガー『存在と時間』における「として構造」をふくむ広義のアスペクト論については、拙稿「ハイデガー、ウォルトン、アリストテレス：虚実とアスペクト知覚の諸問題」『フィルカル』四巻、一号、ミュー、二〇一九年）を参照。
- (17) Vgl. *KU*, § 42. レヴィナス的概念の「存在のただなかからの超脱」が参照可能である。
- (18) 細川亮一『ハイデガー哲学の射程』（創文社、二〇〇〇年）の二二頁、注7を参照。
- (19) 坂下浩司「なぜ若きハイデガーは『動物運動論』を『広範な基盤』として『魂について』と『ニコマコス倫理学』を解釈する計画を『ナトルプ報告』で立てたのか」(*Heidegger-Forum*, vol.2, 2008)を参照。
- (20) 死が生の「日常性」にも入りこみ、超越論的な“Sorge”が、とはいえ両義的に現存在の自己存在を形成する点は、古荘真敬「生ける世界内存在の運動としての『気遣い』」（『現代思想 総特集ハイデガー』、第四六巻、第三号、青土社、二〇一八年）を参照。
- (21) “cura”の「寓話」はアレント出席の一九二五年夏学期講義『時間概念の歴史への序説』ですでに注目され（GA20, § 31, S. 418, GA2, § 42）一九三／四冬学期講義『現象学的研究への入門』では文脈によっては“Sorge”と共に“Interesse”が多用された（vgl. GA17, § 16, § 50）。この点は、田邊正俊「ハイデガーにおける気づかい（Sorge）をめぐる一考察」（立

- 命館大学人文学会編『立命館文学』六二五号、二〇一二年）を参照。
- (22) この古代ローマの系譜は、大西克智『意志と自由』（知泉書館、二〇一四年）を参照。
- (23) H. G. Gadamer, *Erinnerungen an Heideggers Anfänge* (1986), *Gesammelte Werke, Bd. 10*, Mohr Siebeck, 1995, S. 11. 「ハイデガーの思索の本来的なモチーフは、『生の動きの本質、それ自体を構成する解決不可能な両義性にある』」(ebd.)。
- (24) ヌレント『活動的生』（森一郎訳、みすず書房、二〇一五年）五〇八頁の訳注一を参照。
- (25) N. Notomi, *Reconsidering the Relations between the Statesman, the Philosopher, and the Sophist*, in: *Plato's Statesman*, ed. by J. Sallis, SUNY, 2018.
- (26) Vgl. J. B. Lotz, *Martin Heidegger und Thomas von Aquin*, Klett-Cotta, 1975, S. 57f.
- (27) Vgl. H. G. Gadamer, *Heideggers »theologische« Jugendschrift*, in: M. Heidegger, *Phänomenologische Interpretationen zu Aristoteles*, Reclam, 2002, S. 80f.
- (28) H. Arendt, *Denktagebuch 1950-1973*, 2ter Band, herausgegeben von U. Ludz und I. Nordmann, Piper, 2016, Heft XXI, Januar 1955, [1], S. 1059f. Cf. T. Tahir, *Daimon Appearances and the Heideggerian Influence in Arendt's Account of Political Action*, in: *Action and Appearance*, edited by A. Yeaman, P. Hansen, etc. Continuum, 2011.
- (29) Vgl. H. Arendt, *Vita activa*, Piper, S. 94f, Ch. Hadjioannou, *Befindlichkeit as retrieval of Aristotelian ôlâtheôs*, in: *Heidegger Forum* 8, Klostermann, 2013.
- (30) Cf. R. T. Taso, *Arendt's Augustine*, in: *Politics in Dark Times*, edited by S. Benhabib, Cambridge Uni. Press, 2010.
- (31) この点は、信太光郎氏から「教示を受けた。記して感謝します」。
- (32) この点は、森一郎『死と誕生』（東京大学出版会、二〇〇八年）二八五頁以下を参照。「arkhein」と「arkheschai」の違いは以下を参照。H. Arendt, *Denktagebuch 1950-1973*, 2ter Band, *Anmerkungen zu Heft II*, [3], note. 6, S. 923.
- (33) Steven Crowell, Jeff Malpas, *Transcendental Heidegger*, Stanford University Press, 2007, 「ハイデガーによる伝統的形而上学の自由論への批判は、信太光郎『死すべきものの自由：ハイデガーの生命の思考』」（東北大学出版会、二〇一二年）の九三頁以下を参照。

（ちうち のりひろ・弘前大学）